九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 民族言語学の問題としてのタブー : 研究の方法と国際協力・社会開発援助への応用

田中, 俊也
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/1654318

出版情報：言語文化叢書. 9, pp.51-63, 2004-02-20. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

# 民族言語学の問題としてのタブー：
## 研究の方法と国際協力・社会開発援助への応用

田中俊也

## 1. はじめに

民族言語学（ethnolinguistics）は、OED に見られるように、「言語的行動と文化的行動の関係の研究」（the study of the relations between linguistic and cultural behaviour）と定義することができる。あるいは、次の大塚、中島（1982：405）による定義も理解しやすい。

> 狭義の言語学が言語というものの内在的な構造に関心を向け、その分析と記述を行なおうとするのに対し、言語はその構造においてその言語を使っている人々の文化的な関心を反映しているという想定に立って、言語の構造の分析を通じてその言語を使う人々の文化的な特徴を明かにしようとするのが民族言語学である。

特定言語とその話し手の文化との関連性を明らかにするのが民族言語学の課題であるとするならば、民族言語学が扱う問題のひとつとして、「タブー」（taboo）をあげることができる。このタブーという概念は、これまでしばしば歴史言語学（historical linguistics）の分野で取り上げられてきた。ここでは歴史言語学の代表的な教科書による記述を見てみよう。次にあげる Lehmann (1992: 90) の解説に見られるように、タブーは、語彙的変化（lexical change）に関与する要因となると考えられている。

> While words for the meanings may be found in any language, a given form may not be maintained. For example, the Latin word for "tongue" is *lingua,* which is assumed to be related to the English word, if with unclear phonology as are also Lith. *ìlgas* and OIr. *tenge*; the Greek word is *glôssa.* The variation has been explained as resulting from taboo. Social groups commonly substitute words for objects or activities that must not be mentioned except under specific circumstances, so that in time the word itself may be lost. Speakers of Proto-Indo-European applied taboo to names for dangerous animals like the bear, and to those for important parts of the body, such as the hand and the tongue. For western cultures, taboo has been applied to terms for the divinity, sexual relations and excretion. Recently, the area has been shifted to sex and race ... In much the same way the original word for "tongue" was lost in Greek and another term was substituted, to remain as the taboo was superseded.

> 当該の意味を表わす語はどの言語にも見い出されるかもしれないが、所与の形式は維持できないかもしれない。例えば、ラテン語で「舌」を表わす語は *lingua* であり、これは英語の *tongue* と関連した語であると考えられているものの、ちょうどリトアニア語の *ìlgas* や古アイルランド語の *tenge* と同様に、音韻面でその関連性が明白でない部分が残されている。ギリシア語で相当する語は *glôssa* である。このような差異はタブーに起因するものとして説明されてきた。社会を構成する人の集まりは通常、特殊な状況を除いては口にしてはならない対象や行為を表わす言葉を他の表現に置き換えるものである。そのため、やがてその単語そのものが失われる可能性がある。印欧祖語を話す人々は、熊のような危険な動物を表わす名前や、手や舌のような身体の重要な部分を表わす語にタブーを適用したのである。西欧の文化では、タブーは、神、性的関係、排泄を表わす諸単語に適用されてきた。近年では、性と人種にタブー適用の分野は移っている。... ほぼ同じ仕方

で、「舌」を表わす元々の語はギリシア語で失われ、異なる語によって置き換えられたのである。その新たな語が、舌に関するタブーが消失した際に、生き残った。（田中訳）

ここで Lehmann は、印欧諸語における「舌」を表わす語を取り上げ、ギリシア語における相当語が他の方言における語と対応しないこと、およびラテン語、英語、リトアニア語、古アイルランド語における相当語が音韻的に完全に対応するわけではない事実を取り上げている。[1] 印欧祖語時代に「舌」という概念にタブーが働いていて、そのためにギリシア語では異なる語が使用されるようになったという説明がなされている。

タブーによって語彙的変化がどのように進行するかについて、次のように Hock (1986/1991: 293) は解説している。

> What is subject to taboo may differ from culture to culture. But whatever the cultural differences, tabooed expressions tend to be avoided. At the same time, however, complete avoidance commonly is not possible, since on many occasions we will have to refer to the tabooed notion after all. A common avoidance strategy is to replace the tabooed item by a different, frequently euphemistic expression which is semantically appropriate. But the new expression, in turn, needs to become taboo, since it is likewise felt to be too closely linked with the tabooed point of reference. The consequence may be a chain of ever-changing replacements, a constant turnover in vocabulary.
>
> タブーに関与するものは、文化ごとに異なるであろう。しかし、どれほど文化的に異なっていても、タブーとなる表現は忌避される傾向にある。しかしながら、同時に、完全な忌避は通常不可能である。なぜならば、結局のところ多くの機会において、タブーとされた概念に言及せねばならなくなるからである。よくある忌避の仕方は、異なる、そしてしばしば意味的に妥当となる婉曲的な表現で、タブーとなる語を置き換えることである。が、その新たな表現が今度はタブーとなる必要がある。というのも、その語とて同様に、タブーとされる判断基準に近すぎると感じられるからである。結果として、常に変化を求める置き換えの連鎖、語彙における恒常的な転換となりうるものである。（田中訳）

このように、文化的にタブーとされる概念を表わす語は、そのタブーが持続する限り、新たな語に次々に置換されていく傾向にあることが指摘されている。

タブーは言語外的な要因（extra-linguistic factor）であり、文化によって規定されるものである。そのような言語外的な要因が、語彙的変化という言語構造内部の変化に関与しうるものだということである。上に引用した大塚、中島（1982）の記述にあるように、「言語というものの内在的な構造に関心を向け、その分析と記述を行なおうとする」のが言語学プロパーの課題であるならば、「言語はその構造においてその言語を使っている人々の文化的な関心を反映しているという想定に立って、言語の構造の分析を通じてその言語を使う人々の文化的に特徴を明かにしようとする」のが民族言語学の領域となる。この意味で、タブーという文化的要因と言語変化の関連を明らかにすることは、言語学プロパーの問題というよりは、民族言語学の領域に属する課題であると言える。

実際に歴史・比較言語学の分野では、タブーによる言語変化の可能性は指摘されていても、

---

[1] 印欧諸語の「舌」を表わす語が相互に形態的にいかに異なるかの詳細については、Hock (1986/1991: 303ff.) 及び Hock and Joseph (1996: 233f.) を参照されたい。

その観点からの研究を全面的に展開しようとする動向はこれまで生じていないように思われる。例えば、印欧語学（Indo-European studies）において、Lehmann が指摘しているような、「舌」「手」「熊」などの語にタブーが適用されていたという考えは、概ね受け入れられていると思われる。[2] が、少数の個別の事例の範囲を超えて、印欧祖語時代に於けるタブーの構造そのものを明らかにしようという研究が盛んであるとは言いがたい。むしろ、言語学プロパーの対象ではないがゆえにタブーは扱いにくいという理由で、この観点からの言語変化（語彙的変化）の研究は実際にはあまり進んでいないのではないだろうか。[3]

本稿の目的は、タブーによる言語構造の変化という事例は民族言語学研究に属する問題であるということを明らかにした上で、今後この方面の研究をどのように発展させ、それをいかにして国際協力・社会開発援助に応用できるようにするかを考察することである。それに伴い、これまでの民族言語学研究でも、意外にタブーの問題は真正面から研究課題とされていないことも指摘しておかねばならない。例えば、泉井 (1947) では、彼の構想する「言語民族学」研究の課題を論じる際、タブーの問題には全く触れてない。[4]

次節では、これまでタブーの関与の観点から考察されてはこなかった、印欧語の事例２つを観察しながら、今後のタブーに関する民族言語学的研究の方向性を探ることにする。

## 2. タブーが関わると考えられる二つの事例

### 2.1 印欧祖語における「力（がある）」

英語法助動詞 *may* は、古英語動詞 *magan* 'have power' から発達したものである（cf. Tanaka 1990a）。印欧諸語には、古英語 *magan* に相当する、「力がある」という意味を持つ動詞が存在する（cf. Buck 1949: 646ff.）。

(1) 「力がある」を意味する印欧語動詞

a. 古インド語 *śaknoti* 'can'; cf. desid. *śiks-* 'learn'
　　*tavīti, tāuti* 'is strong'; cf. *tura-* 'strong, powerful'

b. アヴェスタ語 *tavaiti*; cf. *tavah-* 'might, power'

c. ギリシア語 *δύναμαι*; cf. *δύναμις* 'strength, power', *δυνατός* 'strong, powerful'

d. ラテン語 *possum*

e. ゴート語 *mag*

f. 古教会スラブ語 *mogǫ, mošti*

---

[2] 「熊」に関するタブーについては、Mallory and Adams (1997: 55f.) でも取り上げられている。

[3] 例えば Campanile (1998) は、印欧語学の教科書の冒頭で印欧祖語時代の文化を著述しているが、そこでは「タブー」という項目は立てられてない。

[4] 泉井が考える「言語民族学」と、本稿で問題としている「民族言語学」は同等のものかという点について、両者は基本的に異なるものではないというのが筆者の立場である。この点については、稿を改めて論じたい。

g. リトアニア語 *galėti*, 3 sg. *gal;* cf. *galia* 'might'
レット語 *var* (*varu, varēt*); cf. *vara* 'might'
cf. 古プロイセン語 *warrin* (acc. sg.) 'might, power'
h. ウェールズ語 *gall*
ブルトン語 *gall, gell*; cf. 古ブルトン語 *gol* 'might',
古アイルランド語 *gal* 'bravery'

興味深いことは、これらの動詞が次の表に示すように、互いに必ずしも語源的に対応するものではないということである。

(2)「力がある」を意味する動詞の語源
a. **tēw-* 'swell': インド・イラン語
b. **deu-* 'admire, grant'(?) (鼻音接中を伴う): ギリシア語
c. **māgh/magh-*: ゲルマン語及びスラブ語
d. **g(h)al-* 'can'(?): バルト語（リトアニア語）及びケルト語（ウェールズ語、ブルトン語）
e. 迂言的表現: ラテン語
f. 語源不明: レット語

これらのうち、インド・イラン語では、**tēw-* 「膨らむ」という語根[5]を使用している。この語根は、インド・イラン語以外でも用いられており、その原義「膨らむ」は、例えばラテン語 *tumēre* 'swell' からも動機付けられる（cf. Buck 1949: 648）。このことから、古インド語 *tavīti, tāuti* やアヴェスタ語 *tavaiti* が、印欧祖語で元々「力がある」という意味を表わした動詞を反映しているとは考えにくい。インド・イラン語の動詞は、「膨らむ」から「力がある」への意味発展をあらわしていると考えるのが妥当であろう。[6] ギリシア語 δύναμαι は中動相の形態を取っており、Pokorny (1994: 218) の解説にもあるように、語根 **deu-* のゼロ階梯形態 **du-* に鼻音接中要素である *na* が接辞されて形成されている。これはギリシア語に於ける発達を表わし、印欧祖語の古い動詞形態を反映するものとは考えにくい。[7] ラテン語 *possum* は、複合によって形成されている（< *potis sum*）。この複合動詞の第一要素である *potis* はラテン語以外の印欧諸語にも対応する語が見い出される（**poti-s* 'lord, husband', cf. Pokorny 1994: 842）のだが、複合による形成自体はラテン語固有のものである。レット語 *var* (*varu, varēt*) は、対応する形態が他の印欧語では見つからず、語源不詳である（cf. Buck 1949: 648）。他方、リトアニア語 *gal* とウェールズ語 *gal* 及びブレトン語 *gal, gel* が語源的に対応することから、「力がある」を意味する動詞に関して、バルト語とケルト語

---

[5] ここでいう「語根」（root, radix）は、Benveniste の語根の理論（及びラリンジャル理論）以前の伝統的な表記に従っている。特に、Pokorny (1994) の語源辞典において用いられている形を採用している。

[6] 古インド語 *śaknoti* 「できる」は、原義である「学ぶ」「やり方を知る」からの発展によるものであろう。

[7] ゴート語弱変化１類動詞 *taujan*「行う」は、このギリシア語動詞と同根であると考えられている。

との間に等語線（isogloss）を見い出すことができる。[8] もうひとつ見いだせる等語線は、ゲルマン語とスラブ語に渡るもので、双方とも印欧祖語の *magh 乃至は *māgh- という語根から派生した動詞を「力がある」という意味で使用している（cf. Pokorny 1994: 695）。この語根は、古インド語、アルメニア語、ギリシア語、リトアニア語など、広く印欧諸語間に見い出されるものであることから、印欧祖語の語彙に遡る可能性が高い。

「力がある」を意味する動詞が印欧諸語の間で様々に異なり、いくつかの語では明白に新しい形態を用いている（例えばラテン語の複合動詞、ギリシア語の鼻音接中辞使用の動詞）ことから、印欧祖語の時代には「力がある」という概念に対して、タブーがあったと考えることはできないだろうか。例えば、「私は力がある」と発話することは、この世を支配している神に自分を例えることとなり、そのためにこのような表現は忌避されたという状況が想像できる。タブーにより、印欧祖語で元々「力がある」を表わしていた動詞は、異なる婉曲的な表現に取り替えられていったのではないだろうか。この推論が可能なものであるかどうか、以下に若干の検討を行いたい。

上に指摘した可能性に対して予想される反論のひとつに、次のような議論があるかもしれない。印欧祖語には「持つ」を表わす動詞が欠如していて、“somebody has something” という意味は “something is to somebody” という形式で表わしていたと考えられている（cf. Buck 1949: 740f; Benveniste 1971: 171; Lehmann 1993: 221f.; 2002: 30; Gamkrelidze and Ivanov 1995: 269）。このことから、印欧祖語の時代には “somebody has power” という表現は存在せず、“power is to somebody” という表現のみが存在したのではないか。”have power” という表現が欠如していたが故に、後に印欧諸語に分裂する過程で、それぞれの語（派）において新たな表現が生まれていったと説明するべきであり、タブーの問題ではないのではないか。

が、この議論は成り立ち難い。もし “somebody has power” という表現は存在せず、“power is to somebody” という表現のみが存在したとするならば、後者の形式の主語となる “power” を表わす語（名詞）が、印欧祖語に明瞭に再建されなければならない。しかし、事実を観察すると、「力」を意味する名詞は、「力がある」を意味する動詞と同様かあるいはそれ以上に、印欧諸語間で語源的に対応しない多様な表現が見い出される。Buck (1949: 295ff.) が示すように、古インド語では *bala-*, *śavas-*, *ojas-*、アヴェスタ語では *aŏjah-*, *ama-*, *zavah-/zāvar-*、ギリシア語では *ἰσχύς*, *κράτος*/*κάρτος*, *δύναμις*, *σθένος*, *ῥώμη*、ラテン語では *vīs*、ゴート語では *maht*、リトアニア語では *galė* という具合である。この事実からして、「力がある」という動詞表現のみならず、「力」を表わす名詞表現も、印欧祖語の時代にはタブーになっていたという説明の方が有効であると思われる。つまり、印欧祖語では「力」を表わす名詞を使用するのを忌避する傾向があり、印欧諸語に分裂した後にこのタブーが解除され、様々な新しい表現が主に婉曲的表現に基づいて発展したと推論しうるのである。

印欧祖語の時代、「力」にまつわる表現がタブーとなっていたとするならば、元々「力」

---

[8] バルト語とケルト語以外で当該の語根から派生した語が見いだせるのは、スラブ語のみである。例えば、古教会スラブ語 *golěm* ‘big, high’ がそれに当る。

を表わした名詞や「力がある」を表わした動詞は早い時代に失われ、文献時代の資料に基づいての再建は困難であるかもしれない（cf. Lehmann 1993: 260f.）。ここでは、ゲルマン語とスラブ語の間の等語線を形成する *magh- 乃至は *māgh- という語根が、どのようにして後に「力」や「力がある」という表現に発達したかについて問題を搾り、考察を進めていきたい。

先にも述べたように、 *magh-/*māgh- という語根は、多くの印欧語に見い出される。以下の (3) は、Pokorny (1994: 695) や Lehmann (1986: 239) に基づいて作成した表である。

(3) *magh- 乃至 *māgh- から派生した語
a. 古インド語 *maghám-* 'gift, reward, wealth'
b. アヴェスタ語 *maga-* 'gift, grace'
　アヴェスタ語 *moγu-*, OPers *maga-* 'Median priestly class, magician'[9]
c. ギリシア語 *μῆχος*（ドーリア方言では *μᾶχος*）'means, contrivance'
　ギリシア語 *μηχανή*（ドーリア方言では *μᾱχανᾱ́*） 'means, invention, machine'[10]
d. トカラ語 A, B *mokats* 'mighty',
e. アルメニア語 *marthankh* (> *mag-thra- or *mag-tro-?) 'aid, help'
f. ゲルマン語 *mag- 'have power'
g. 古教会スラブ語 *mogǫ* (inf. *mošti*) 'can', cf. *mošti* 'might, power'
h. (可能性として) リトアニア語 *mokėti* 'can', cf. *makėti* 'please, be pleasing', *mėgti* 'like'; レット語 *mẽgt* 'be used to, accustomed to'

(3) に挙げた語の中で、インド・イラン語名詞には「贈り物」などの意味があり、これらの語派特有の意味変化を示唆している。しかしながら、それ以外の語は、多かれ少なかれ「力」を連想させる意味を保っている。例えば、ギリシア語 *μηχανή*（ドーリア方言では *μᾱχανᾱ́*）における「機械」の意味は、「（～する）力がある物」という原義が予想される。しかしながら上に述べたように、 *magh-/*māgh- が印欧祖語の早い時代から「力」を表わす語であった可能性は低い。タブーによって元々「力（がある）」を表わした語が消失した後に、婉曲的に「力（がある）」という意味を含意する表現だったと考える方が、より妥当であると思われる。では、もしそうだとするならば、*magh-/*māgh- の原義は何だったのだろうか。

この点に関して、Brugmann (1917-20: 140-1) が興味深い議論を提供してくれる。Brugmann は、例えばリトアニア語の *vaîkas* 「若者」と *vėkà* 「力」が形態的に関連づけられるように、「若者」と「力（がある）」という語は、関連しうると主張するのである。すなわち、*magh-/*māgh- と *maghos 'young' や *maghu- 'a boy' (> Av. *maγava-* 'unmarried', Go. *magus* 'a boy') は関連していると考えている。即ち、「若者である」ことは、「力がある」

---

[9] Pokorny (1994: 695), Ernout & Meillet (1959: 379), Lehmann (1986: 239) などによれば、ギリシア語 *μάγος* 'magician' は古ペルシア語からの借入語であり、ラテン語 *magus* 'magician' はギリシア語からの借入語である。

[10] Ernout and Meillet (1959: 376), Lehmann (1986: 239) などによれば、ラテン語 *māchina* 'machine' は、ギリシア語ドーリア方言 *μᾱχανᾱ́* の借用である。

ことを含意するというものである。Brugmann はタブーについては、論じていない。しかしながら、本稿の議論のように、「力（がある）」という表現に元々タブーがあったと考えると、この Brugmann の指摘はより説得力をもつことになるのではないだろうか。印欧祖語の語根 **magh-* の原義は「若者（である）」であったのだろう。では、何故「若者（である）」という意味を持つ語根が、後に「力（がある）」という意味も合わせ持つようになったのか。それは、「力（がある）」という意味を表わす語の使用は印欧祖語の早い時代にタブーとされ、婉曲的にその意味を含意しうる他の表現が求められるようになったからではないか。「私は若者である」という表現が「私は力がある」という意味を婉曲的に含意するが故に、印欧祖語の遅い時代には、**magh-* は「力（がある）」という意味を表わすためにも使用されるようになったと考えられる。[11]

印欧祖語において「力（がある）」という表現がタブーの対象になっていた可能性について、論じてきた。では、以上の議論で、印欧祖語における「力（がある）」という概念へのタブーの適用ということが民族言語学的に立証されたと主張してよいだろうか。答は否である。以上の議論は、専ら言語内的な資料を観察、分析し、その資料を合理的に説明するために蓋然性が高いと思われる議論を展開してきたものである。しかしながら、以上の議論に加えて必要なものがある。それは、言語外の、あるいは言語構造内部から得られる資料以外の証拠からの裏付けである。もし本稿が主張するように印欧祖語に当該のタブーがあったとしたならば、印欧諸語の文献出現時代にも、かつてのタブーの名残りを表わす証拠が観察されうるのではないか。古い印欧諸語のテキストから、そのようなタブーの名残りを示すような証拠を、可能な限り豊富に指摘してはじめて、本当に当該のタブーの存在が高い蓋然性をもって、民族言語学的に立証されたと主張できるようになるだろう。[12] この点については、以下 2.3 節でもう一度触れることにする。

2.2 印欧祖語における「借り（がある）」

英語法助動詞 *shall* は、古英語動詞 *sculan* 'have debt' から発展したものである（cf. Tanaka 1990b）。印欧諸語には、古英語 *sculan* に相当する、「借りがある」という意味を表わす動詞が存在する（cf. Buck 1949: 794f.）。

(4) 「借りがある」を意味する印欧語動詞
a. 古インド語 *dhr̥-* 'hold' > 'owe'
b. ギリシア語 ὀφείλω

---

[11] Mallory and Adams (1997: 656) では、本稿の考えとは逆に、**magh-* における「若者」の意味は「力（がある）」乃至は「できる」の意味から発展した可能性があると示唆している。

[12] Campanile (1998) の用語を用いて、同じ主張を言い替えるならば、「民族言語学の問題としてのタブーの研究を進めるにあたっては、語彙的な方法（the lexicalist method）のみならず、テキスト的な方法（the textual method）にも従って十分な調査を行い、双方から見い出される現象を最も合理的につなげる説明を求めなければならない」ということになる。

c. ラテン語 *debeo*
d. ゴート語 *skal*
e. 古教会スラブ語 *dlъžьnъ byti*; Scr. *biti dlužen*
f. リトアニア語 *skelėti*; cf. *skola* 'debt', *skolingas* 'owing', *skilti* 'get in debt'
*kaltas* or *skolingas buti* (lit.) 'be owing'; cf. *kaltas* 'owing, obliged', *kalte* 'debt'
レット語 *parādā būt* (lit.) 'be in debt', with locative of *parāds* 'debt'
g. 古アイルランド語 *dlegair domsa* (lit.) 'claim is had on me' > 'I owe'
ウェールズ語 *bod mewn dyled(i)* 'be in debt (to)'; cf. *dyled* 'debt'
ブルトン語 *dleout* 'owe, ought'

以下の (5) から、これらの動詞が異なる語源を持つことが分かるだろう。

(5) 「借りがある」を意味する動詞の語源
a. **dher-* 'hold': 古インド語, cf. Pokorny (1994: 252ff.)
b. **(s)kel-* : ゲルマン語、及び、バルト語（リトアニア語）
c. 迂言的表現: ラテン語、スラブ語、バルト語（レット語）、ケルト語（古アイルランド語、ウェールズ語）
d. 語源不明: ギリシア語

Buck (1949: 794) が指摘する通り、'have, hold (something belonging to another)' という概念が、古インド語の当該動詞に潜んでいると考えられる。この例、並びにラテン語の *dēbeō* (< *dē* + *habeō* 'have (something) from (someone)', i.e. 'have something belonging to another', cf. Buck 1949: 794) は、「借りがある」を婉曲的に表わす表現となっていると考えられる。また、「借りがある」という意味の動詞は、しばしば迂言的表現で表わされるというのも、特徴的である。(4) のスラブ語、バルト語、ケルト語の表現を見られたい。ギリシア語の ὀφείλω は迂言的表現ではないが、他の印欧諸語に対応する語のない、語源不詳の動詞である（cf. Buck 1949: 794）。ブルトン語 *dleout* 'owe, ought' は、印欧祖語 の **dhl̥gh-* 'debt, obligation' からの派生であると考えられるかもしれないが、それも問題がないわけではない。印欧語語源辞典では、Walde and Pokorny (1927-1932) も Pokorny (1994) もこの語を掲載しておらず、語源不詳扱いとなっているからである。ゲルマン語の **skal-* は、リトアニア語の *skelėti* 'owe' (cf. OLith. *skelù*) と關連している。このように、ゲルマン語とリトアニア語の間には、「借りがある」という動詞に関して等語線を見い出すことができるのだが、ラテン語 *scelus* 'crime, wickedness' がこれらの動詞に語源的に対応するとすれば、[13] その等語線はラテン語にも広がっている可能性がある。

このように「借りがある」という意味を表わす語が印欧諸語において互いに対応しないという事実について、印欧祖語を話す人々の間に「借りがある」という概念がなかったと想定することができるだろうか。すなわち、印欧語が方言に分裂して後に、各方言（あるいは方言グループ）において互いに独立的に「借りがある」という意味の動詞を発展させたと考え

---

[13] ただし、下に述べるように、Lehmann (1986: 313f.) はこのラテン語名詞とゲルマン語、リトアニア語動詞との語源的つながりに関して、意味的な見地から否定的見解を述べている。

ることは、妥当であろうか。Lehmann (1990) が論じているように、印欧祖語を話す人々が単なる「無法な野蛮人（ lawless barbarians ）」であったとは考えにくい。彼らが、基本的な人間関係を左右する「何かにおいて誰かに借りがある、負い目がある」というような概念を所有してなかったとすれば、どうやってユーラシア大陸の広範な部分に広がっていけるような機能的な戦闘集団を形成できたであろうか。このように考えるならば、「借りがある」という動詞が印欧諸語の間で多様であるという事実に、別の説明を求める必要がでてくる。

上で観察したように、「借りがある」という意味の印欧語動詞のいくつかは、婉曲表現であると思われる。ここからして、当該の表現には、印欧祖語の時代にタブーがあったと考える余地がある。印欧祖語を話す人々の社会では、「借りがある」あるいは「負い目がある」と口にすることは、忌避される傾向があったかもしれない。Anthony and Brown (1991) などの考古学的研究によれば、印欧人が黒海北（North-Pontic）の故地（Urheimat）からより広範な地域に広がり始めたのは、馬のはみ（bit）が発明されて乗馬が始まった時からのことである。当時の印欧人社会の中心にいた階層は、馬の背に跨がった「高貴なる戦士 (noble warriors)」であったと考えられる。とりわけ高貴なる戦士にとって、「借りがある」「負い目がある」という事態は恥ずべきことであり、そのようなことを口にすれば自らの誇りある独立[14]を脅かすかもしれず、それが故に忌避すべきことだったと推論することは、不可能ではない。もしこの推論が正しいとすれば、当時の社会では、そのような事態が生じかつそれを口にせねばならぬ場合は、婉曲的な表現で「（私は）借りがあり、負い目がある」という表現を代用したことと考えられる。また第１節で見た Hock (1986/1991) の解説にもあるように、そのような婉曲的な表現は、次々に取り替えられていったということも予想される。間接的に「借りがある」という意味を含意する多様な表現が生まれた後、印欧祖語が方言に分裂し、「借りがある、負い目がある」という表現がタブーでなくなった時代を迎えた時に、古インド語の *dhr̥-* やラテン語の *debeo* という婉曲表現に基づく動詞、そしてスラブ語、バルト語、ケルト語に見られる多様な迂言的表現が、各印欧方言（あるいは方言グループ）で根付いたと考えることができる。

上のような推論に対して、2.1節で「力がある」という動詞について論じた際と同様な反論が予想される。即ち、印欧祖語では「～を持つ」という表現が欠如しており、その意味は「～が～にある」= “something is to sombody” という形式であらわされていたが故に、’have debt’ という動詞は存在せず、”debt is to somebody” という形式のみが存在したという論である。しかしながら、「力がある」という動詞に関してもそうだったように、この議論は「借りがある」という動詞についても成り立ち難い。印欧祖語で「誰某は借りがある」という表現が、専ら “debt is to somebody” と表現されていたとするならば、その文の主語となる「借り」という名詞が明確に印欧祖語に再建されなければならない。しかしながら、事実はこれとは逆である。「借りがある」という意味の動詞の多様性と同様、「借り」という名詞表現は印欧諸語で互いに対応しない異なる形が観察される。例えば、古インド語では *r̥na-*、ギリシア語

---

[14] 関連する議論として、Lehmann (1993: 287f.) も参照のこと。

では *χρέος*、ラテン語では *dēbitum*、ゴート語では *dulgs*、古英語では *scyld*、古教会スラブ語では *dlъgъ*、リトアニア語では *skola*、古アイルランド語では *fiach* となっている（cf. Buck 1949: 795f.）。このことから、「借りがある」という動詞表現のみならず、「借り」という概念そのものに印欧祖語の時代にはタブーがあったと考えられる。「借り」を表わす表現は、印欧祖語分裂後になってはじめてタブーが解除され、各印欧語において独自の形が定着したと推論できる。

以上の推定をもとにして、ゲルマン語とリトアニア語の「借りがある」という語義の動詞を形成する印欧語語根 **(s)kel-* の原義について、ここに若干の考察を付け加えたい。上の議論から、この語根の原義は、婉曲的な方法で「借りがある」という意味を含意することができるようなものだったと考えられる。Lehmann (1986: 314) は、ラテン語 *scelus* 'crime, wickedness' は、当該のゲルマン語、リトアニア語動詞とは語源的に関係しておらず、同音異義の印欧語語根 **(s)kel-* 'bend, crooked' (> Gk. *σκολιός* 'crooked, wicked') から派生したものであると主張する（cf. 上記註13参照）。Pokorny による印欧語語源辞典 (1994: 927f. *s.v.* 2. *(s)kel-* and 4. *(s)kel-*) でも、これらは二つの異なる語根として区別されている。しかしながら、これら二つの同音異義の語根が、印欧祖語の早い段階ではひとつのものであったという可能性はないだろうか。即ち、祖語の初期の時代の語根 **(s)kel-*「曲がっている」が、祖語の後期の時代には「借りがある」という表現に代るものとして使われ、その用法がゲルマン語とバルト語に引き継がれたのかもしれない。「私は借りがある」というのが、当時の人々にとって望ましくない状況をあまりに直截的に表わすものであったが故に、間接的に「私は曲がっている」と表現したという事態を想像するものである。

このような推論を裏付けるために先ず求められなければならない経験的証拠として、印欧語内または印欧語外の言語で、「借りがある」という表現に「曲がっている」という表現を当てていることが明瞭に見てとれる事例が少なくともいくつか存在するということを示さねばならない。そのような独立的な証拠が提示されない限り、上の議論は、その可能性があるかもしれないという程度の「想像」の域に留まるものでしかない。

また、この小節全体の、「借り（がある）」という概念に対して印欧祖語時代にタブーがあったと想定することに対して、そのタブーの名残りを示す証拠が、印欧諸語の初期のテキスト内に辿ることができるか否かという点も、大変重要である。そのような言語構造外にある文化的な証拠が求められない限り、民族言語学的に妥当な議論として成立しないのである。

### 2.3 まとめ

ある概念が印欧諸語の間で互いに対応しないという言語事実があった場合、それらが祖語の時代のタブーを反映しているとすぐに結論することができないことは言うまでもない。上に論じてきたように、個々の事例に関して、まずは言語内的事実を慎重に調査せねばならない。様々な可能性の中から、祖語の時代に当該の概念に対してタブーがあったと考えるのが最も妥当だと推論される場合でも、それだけでは推論に留まると言わざるを得ない。 2.1節の「力（がある）」、2.2節の「借り（がある）」という表現で行ったような議論を裏付ける

ような、言語外的な証拠を豊富に収集することが、かつてのタブーの存在を証明するのに不可欠である。具体的に言えば、各印欧方言の初期段階にあるテキストに、かつて存在したであろうタブーの名残りを示す証拠がどれだけ見い出されるかが、鍵となるであろう。民族言語学に基づく研究は、言語内構造と言語外的証拠（文化的要素）の双方を詳細に分析、検討し、それらの間を繋ぐ最も合理的説明を求めなければならない。言語内構造のみに基づく議論、言語外の文化面にのみ基づく議論では、民族言語学的に妥当な説明を構成することにならないということを、強調しておきたい。[15]

## 3. タブーの類型論をめざして

本稿では以上の討論において、民族言語学の問題としてのタブーに関する研究方法について論じてきた。しかしながら、上に主張してきたような方法で、個々のタブーの事例に接近するだけでよいかといえば、そうではない。本稿第１節で予め言及しておいたように、個々のタブーの事例を集積した後、ある言語一共同体（民族態）におけるタブーの構造そのものの特質を明らかにするべく、研究の水準を上げる必要がある。

言語類型論（linguistic typology）で検討されてきた方法が、人間社会（言語一民族態）におけるタブーの構造を解明しようとする民族言語学研究においても、有用であると思われる。特に目標としたいのは、Greenberg (1963) により提唱された「含意的普遍特性（implicational universal）」を、タブーに関する民族言語学的研究でも得られるようにすることである。含意的普遍特性とは、普遍的に「p ならば q 」という含意が成立することを意味する。[16] ある言語-民族態において、ある種の表現にタブーが存在するならば、それは同時に別のある表現にタブーが存在することになるという類いの法則を、普遍的レベルで明らかにすることである。

国際協力・社会開発援助を行う者は、援助の対象となる人々の文化を尊重しながら現地に入っていくことが通常要請される。[17] その際、援助をする側に、現地の人々の言語一文化を理解する必要が生じることは言うまでもない。そのような文化や言語に関する様々な情報の

---

[15] Gamkrelidze and Ivanov (1995: 586) は、印欧諸語において「雨が降る」という意味の動詞が互いに対応しない事例を取り上げ、「タブーのために元々神聖だつた語が他の語彙的形成物で置換される現象（taboo replacement of the original sacred term by other lexical formations）」として説明を与えている。その理由として、「雨は至高の神から送られていて（rain was sent by the supreme deity）」、「神が送る雨は農業にとって死活的だった（the rain he sent was crucial to agriculture）」からだとしている。この推論を裏付ける文化的証拠を、Gamkrelidze and Ivanov (1995: 587) では、ヒッタイト語、バルト・スラブ語、及びギリシア語のテキストから示している。（「雨が降る」という意味の印欧語動詞の分析は、Tanaka (2003: 31ff.) も参照されたい。）

[16] より正確に言えば、「p ならば q 」、「non-p ならば q」、「non-p ならば non-q 」の３つの含意が成立する一方、「p ならば non-q 」という含意が決して成立しない場合に、p と q との間に含意的普遍特性が成り立つとされる（cf. Comrie 1981: 17）。

[17] 例えば、中村 (2003) においても、ペシャワールでの医療活動では、現地の人々の文化を尊重し、文化干渉を行わない方針をとっていることが明確に述べられている。

蓄積が、今後更に進んでいくことであろう。だが、個別な情報を個別なままにしておくのではなく、学問的に首尾一貫した方法のもとに体系的にそれらの構造を明らかにしていく必要があるのではないか。例えば、本稿で取り上げたような、言語使用の面でのタブーに関して、豊富な含意的普遍特性が明らかになっていれば、援助者がこれから接していく言語一民族態がどのような特性を持つものか、（単にどのような表現を口にしてはならないかという個別の事例を超えて）予め体系的な理解ができるようになると思われる。

多様な人間社会が地球上に存在しており、それらの言語一文化態を等しく尊重した上での普遍特性の研究の進展を、今後の民族言語学研究は目標とせねばならない。そのような水準にまで研究が進めば、国際協力・社会開発援助の実践現場においても、援助者が現地で様々な体験を重ねてさらにより深い理解をする手引き・出発点としての「知」を、民族言語学研究が提供できることになると思われる。

## 4. 結論

本稿では、民族言語学プロパーの問題としてのタブーを取り上げ、論じてきた。この分野での今後の研究の進展と国際協力・社会開発援助への応用のために、次の二つのことを本稿の結論として提唱したい。

1）タブーという言語外の、民族文化の領域に属する要因は、言語内構造（特に語彙構造）に影響を与えるものである。この、「文化」と「言語構造」双方に跨がる現象を研究するためには、「文化」の面と「言語構造」の面双方の詳細な分析と、その両者をつなぐ合理的な説明が必要であり、片方だけの観察や分析だけでは、不十分である。

2）民族言語学の問題としてのタブーの研究を進めていく上で、個別の民族一言語態における個別の事例を1）に沿った形で可能な限り多く分析し、最終的には、普遍的なタブーの類型論を構築することを目標とすべきである。そこまで研究が進めば、多様な人間社会の体系的理解、及び、国際協力・社会開発援助の現場への実践的貢献ができるようになるであろう。

## 参照文献


Anthony, David W. and Dorcas R. Brown 1991. "The Origins of Horseback Riding." *Antiquity* 65, 22-38.

Benveniste, Émile 1971. *Problems in General Linguistics,* tr. by Mary Elizabeth Meek and Coral Gables. Florida: University of Miami Press.

Brugmann, Karl 1917-20. "Zur griechischen und lateinischen Wortgeschichte." *Indogermanische Forschungen* 38, 128-43.

Buck, Carl Darling (comp.) 1949. *A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Languages: A Contribution to the History of Ideas.* Chicago: University of Chicago Press.

Campanile, Enrico 1998. "The Indo-Europeans: Origins and Culture." In Ramat and Ramat 1998, 1-24.

Comrie, Bernard 1981. *Language Universal and Linguistic Typology.* Oxford: Blackwell.

Ernout, A. and A. Meillet (comp.) 1959. *Dictionaire étymologique de la langue latine,* 4th edition. Paris: Klincksieck.

Gamkrelidze, Thomas V. and Vyacheslav V. Ivanov 1995. *Indo-European and the Indo-Europeans,* 2 vols., tr. by Johanna Nichols. Berlin: Mouton.

Greenberg, J. H. 1963. "Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements." In Greenberg 1963.
— (ed.) 1963. *Universals of Language.* Cambridge, Mass.: MIT Press.
Hock, Hans Henrich 1986. *Principles of Historical Linguistics.* Berlin: Mouton de Gruyter.
— 1991. *Principles of Historical Linguistics*, 2nd edition. Berlin: Mouton de Gruyter.
— and Brian D. Joseph 1996. *Language History, Language Change, and Language Relationship: An Introduction to Historical and Comparative Linguistics.* Berlin: Mouton de Gruyter.
泉井久之助（1947）『言語民族學』 大阪：秋田屋
Lehmann, Winfred P. (comp.) 1986. *A Gothic Etymological Dictionary.* Leiden: Brill.
— 1990. "The Current Thrust of Indo-European Studies." *General Linguistics* 30, 1-52.
— 1992. *Historical Linguistics,* 3rd edition. London: Routledge.
— 1993. *Theoretical Bases of Indo-European Linguistics.* London: Routledge.
— 2002. *Pre-Indo-European* (Journal of Indo-European Studies Monograph No. 41). Washington: Institute for the Study of Man.
Mallory, James P. and Douglas Q. Adams (eds.) 1997. *Encyclopedia of Indo-European Culture.* London: Dearborn.
中村哲 2003. 「九州大学アジア理解プロジェクト：ペシャワール会現地代表中村哲氏講演会」 2003年10月14日、九州大学創立五十周年記念講堂における講演
OED 1993. *The Oxford English Dictionary* 2nd Edition *on Compact Disk* (for the Apple Macintosh). Oxford: Oxford University Press.
大塚高信、中島文雄（1982）『新英語学辞典』 東京：研究社
Pokorny, Julius (comp.) 1994. *Indogermanisches etymologisches Wörterbuch,* 3rd edition, 2 vols. Bern: Francke.
Ramat, Anna Giacalone and Paolo Ramat (eds.) 1998. *The Indo-European Languages.* London: Routledge.
Tanaka, Toshiya 1990a. "Semantic Changes of CAN and MAY: Differentiation and Implication." *Linguistics* 28, 89-123.
— 1990b. "Remarks on the Semantic Properties of Old English SCULAN: A Hypothesis for the Rise of a Necesssity Modal Meaning." *Linguistics and Philology* 10, 1-15.
— 2003. "Towards Reconstruction of the Proto-Indo-European Inactive Class of Verbs: Five Categories and Sixteen Specimens." *Gengo-Kagaku (Linguistic Science)* 38, 1-53.
Walde, Alois and Julius Pokorny. (comp.) 1927-1932. *Vergleichendes Wörterbuch der Indogermanischen Sprachen,* 3 vols. Berlin: de Gruyter.